

# 身体の造形力

## ——戦時期における今和次郎の生活論——

祐成 保志

本論文は、建築学者・今和次郎（1888-1973）を、二つの密接に関連していた活動についての考察を通じて、同時代の文脈に位置づけることを試みる。具体的には、1930年代の農村住宅改善への関与と戦時期の生活論に焦点を当てる。これらの活動は、これまでの今和次郎論のなかで多くの場合見過ごされてきたが、そのことは、生活を論じる言説が内包している戦時／戦後、権力／反権力、生産／消費といった二項対立の存在を示唆している。今和次郎の軌跡から浮かび上がるのは、そうした図式のなかに封じ込めることのできない、造形論的身体観と媒介者に注目した改善論である。彼の活動が提起するのは、モノと身体の交渉という視点、そして人々の造形力を組織する媒介者の実践から、生活の近代を読み直すことの必要性に他ならない。

### 1. 『今和次郎集』の空白

1940年、「家庭科学研究所」<sup>(1)</sup>の機関誌『家庭科学』に、同所委員でもあった早大教授・今和次郎（1888-1973）は、「生活の地理学」という論考を寄せている。この中で彼は家政学との対比のもとに、「生活学」の語を初めて用いた<sup>(2)</sup>。

在来の「家事学」或は「家政学」という名目を、この際、「生活学」或は「国民生活学」とでも改称することが適切ではないかとわたくしは考える。その方が研究目的を指示することになって、研究意義を深めることにもなるし、また自分一家限りのことでなく、これに関係する広い領野をも含めて対象とする意も含まれるからである。（今 [1940:14]）

この論考は、当時女学校などで実施されていた家政教育や、1920年代に展開された「生活改善運動」<sup>(3)</sup>への批判のために執筆されたものである。今は、それらの問題点として、「発達した理想的な基準を現実生活の面前に示すだけ」（今 [1940:4]）の怠慢を指摘する。指導者層において「生活指導というものは、いつも特定の生活に対して具体的になされねば意味がない」（今 [1940:2]）ことが十分に理解されておらず、「適用的な家事学或は臨床的な家事学」（今 [1940:2]）が軽視されていると説く。そして、臨床家事学の基礎としての「生活の地理学」<sup>(4)</sup>、すなわち地域、階層、職業等によって描き分けられた「生活の分布図」（今 [1940:7]）を明らかにする作業の組織化を提唱する。

1939年、今は自由学園の卒業研究「能率から見た『農村主婦の生活』調査」の指導を担当し

ている。都市中流家庭、都市近郊農村、東北農村の数軒の農家を対象とした家事労働時間、主婦の住宅内各所での滞在時間、台所の動線、一家の持ち物などに関する調査の試みであった<sup>(5)</sup>。『婦人之友』に掲載された調査報告の序文において、今は「比較生活学が、これらから生長して行くものと信じたい」(今 [1939a:115])と述べている。「生活の地理学」という構想に関して、直接にはこの調査の経験が念頭にあったと考えられる。

また、「生活態度の問題」(今 [1941b])では、当時盛んに叫ばれていた「生活の科学化」というスローガンに対する自らの見解を述べている。ここには、彼が構想する「生活学」の基本的な姿勢をみることができる。それは、「習俗」の解明と生活の改善への、表裏一体の関心であり、生活を部分の寄せ集めではなく全体性として捉える視点である。

生活の科学化とは既成生活を部分的にだけ科学化するのでは不徹底である。既成生活形態即ち習俗化した生活そのものについて科学することが先行しなければならぬ。[今1941b:10]

われわれの生活のなかに巢食うている寄生虫のような、衣食住の中における有害な習俗を、習俗自体を科学することで解消して行くこと [...]。(今 [1941b:13])

これまで、今が家政学批判を展開し、生活学を提唱したのは戦後、とりわけ1950年代以降のことである、という見解が一般的であった。代表的なものが、「生活学が初めて提唱されたのは、『大阪新聞』一九五一年二月二一日付に発表された今和次郎の『生活学への空想』という短文によってであった」(川添 [1982:187])とい

う、川添登による指摘である。

このような定説を補強するのが今和次郎の存命中(1971~72年)に刊行された著作集『今和次郎集』の編成である。『生活学』(第5巻)や『家政学』(第6巻)に収められた著作の初出を見れば、ほとんどが戦後に発表されたものである。上に見たように、戦時期の今和次郎は、『家庭科学』に限ってみても20編以上の論考を寄せている。にもかかわらず、この時期の生活論および家政論は、著作集に収録されていない<sup>(6)</sup>。

『造形論』(第9巻)の解説を担当した吉阪隆正は、同著作集に収められた論考だけを年代別に並べてみせ、今和次郎の関心の移り変わりを見ようとする。すなわち、「第一期 [1920年代]は民家と考現学に集中、次 [1930年代]に服装にうつり、それから [戦後]住居、生活、家政に、そして一貫して続いたのが、[...]造形についての文である」[吉阪1972:504]。このような整理は、かえって読者を誤解に導く。さらに言えば、この著作集そのものが、読者を吉阪のような理解へと誘導するような構成になっているのである。

民家論の側から見てもその事情は変わらない。『民家論』(第2巻)、『民家採集』(第3巻)の元になっている著作に、1941年に刊行された単行本『草屋根』がある。原著には『家庭科学』所載の「東北農村住宅改善」(1937.5)、「雪国の試験家屋」(1939.5)を含む1930年代後半の論考6編が収録されているにもかかわらず、著作集には収められていない。このことにより、『草屋根』においては示唆されていた民家論と農村住宅改善との密接な関わりが不明確になっている。

実際には、上に引用した二編のように、今和次郎にとっての1930年代後半から1940年代前半は、未完成の生活学を模索していた重要な時期

であり<sup>(7)</sup>、近代日本における生活をめぐる知の展開を見る上でも無視できないものであったと考えられるにもかかわらず、著作集において1940年前後の今和次郎の足跡はほぼ消去されてしまっているのだ。

## 2. 生活の「戦後化」

本稿は単なる考証を目的としたものではない。こうした部分にこだわるのは、「生活学」の出自を戦後に設定することには、単なるミスや物忘れには還元されない、今和次郎を論じること、さらには「生活」について論じることに関わる言説空間の構造が徴候的に現われていると考えるからである。

著作集が編纂されたのは1970年代初頭であった。しかし現在でも、今の生活論が戦後に形成されたという見方は一般的であり、根強い力を持っている。例えば、生活者論の先駆者として今和次郎を取り上げている天野正子 [1996] は、やはり戦時代の今を無視し、「考現学が関東大震災の焼け野原から生まれたように、今の生活学も、戦後の混乱期を生きる人びとの具体的な『生活』の事実に着目することから生まれた」と、生活学の由来を戦時の経験ではなく、「戦後」の経験に還元している<sup>(8)</sup>。そして、『『生活学』という言葉は今がはじめて使ったのは、一九五一年の新聞記事『生活学への空想』においてであった』(天野 [1996:66]) と、川添の記述を無批判に受け入れている。

むろん、一般に「生活研究」自体が戦後に起源を持つとされているわけではない。1940年前後、永野順造『国民生活の分析』(1939年)、安藤政吉『国民生活費の研究』(1943年)、籠山京『国民生活の構造』(1943年)、大河内一男編『国民生活の課題』(1943年)など、研究史上重

要な業績が数年のうちに現れている経緯については、生活研究の歴史的回顧の文脈ではよく言及されている(生活研究同人会 [1982] 等)。

ここで注意しなければならないのは、今和次郎の生活学が、そうした雇用労働中心の社会政策論的生活研究に対し、娯楽や休養などの側から生活を把握する独自の立場として、戦後、いわば「遅れて」登場するとされることである(川添 [1982] ; 寺出 [1994] 等)。生産優先の(戦時的)生活研究と、余暇と消費を重視する(戦後的)生活研究が対比される文脈—それはまた今が「反権力的」な価値観を体現しているという理解にも連続しうる—において、今の生活研究が「戦後的」なものであるとの判断が定着したのではないだろうか<sup>(9)</sup>。

著作集が戦時代の活動を空白のままとしたこと、換言すれば、今和次郎の生活研究の「戦後化」とも言える一見小さな出来事の背景には、「生活」という概念をめぐる思考が持っている「ねじれ」が存在する。すなわち、生活の概念そのものは戦時代を通じて発見されるにもかかわらず、戦争と生活が対立しているという観念が、その歴史的過程についての考察に、一定の枠をはめてしまっているのである。

一方、戦時代の活動が見過ごされてきたということとは別に、今和次郎が生涯を通じて精力的に行った実践活動が、その思想ほどには十分に検討されてこなかった点も、再考の余地があるだろう。武長脩行 [1982] は、今の生活改善運動への関与の重要性を指摘しているが、ほぼ著作集だけに依拠しているために1930年代の具体的な活動内容に迫りえていない<sup>(10)</sup>。あるいは、今和次郎の蔵書、ノート、スケッチなどを精査することで、その思索の現場を明らかにしようとした黒石いずみ [2000] は、今和次郎の方法を実証主義建築(史)学のオルタナティブ

として検討し、特に、今が住居を歴史、社会生活、個人生活が重層する「舞台」「場」として設定した点を高く評価する。その記述は著作集を越える試みとして注目されてしかるべき作業であるものの、今を一般的な建築学と対比させて検討した上でそのオリジナリティを明らかにするという目的をもっているため、「同時代の人々には理解できなかった」(黒石 [2000:305]) 部分が強調されている。

これに対して本稿の立場は、今の広範な活動のうち、同時代に積極的に深く関与していこうとした側面に着目するというものである。思想家としての今和次郎を再構成するという視点からは、運動家としての今和次郎は明確な像を結びにくい。彼を完結した思想家としての像から解き放して同時代の文脈に再定位することが必要であろう。以下に提示しようとするのは、戦略的に行動しようと努める今和次郎の逡巡を含んだ軌跡の一端である。それを生活改善運動の展開や同時代の生活研究者の活動との関係のなかで考察することが可能であり、必要なのではないだろうか。そのような作業の延長線上に、近代日本における生活の意識化という、より大きな運動についての考察が可能となるだろう。

### 3. 「合理化」の再検討

今和次郎は、まず、その民家研究で名を知られた。この民家研究の生成期については比較的よく言及されている(竹内 [1971] ; 川添 [1982] 等)。1917年、柳田国男(貴族院書記官長)、佐藤功一(早大教授)、石黒忠篤(農商務省農政課長)などが古民家の保存を目的に組織した団体「白茅会」の一員として調査をはじめ、1918年、神奈川県内郷村での「郷土会」との合同村落調査で家屋と敷地の調査を担当する。また、翌年に

は石黒忠篤によって農商務省の嘱託を委任され、民家の調査旅行に便宜を与えられた。この時期の活動の成果は、『日本の民家：田園生活者の住家』(1922年)にまとめられる。

同書は版を重ね、民俗学、建築学、人文地理学など限られた領域でしか流通していなかった「民家」という語を普及させていった。「最近わが国を訪れる外人の間では、ミンカは崇拜の対象でさえある」(伊藤 [1963:9])とされるように、「民家」はしだいに、ツーリズムの視線と結びつけて用いられるようになる。そして彼自身、1920年代前半には「住宅改良会」が発行する都市中間層を読者とする雑誌『住宅』に「田園趣味雑談」と題する連載(1924年5~11月)を寄稿しているように、そうした農村住宅に対する観照的態度の流行に、それほど距離を取ろうとはしていなかったように見える。

しかし、先に引いた「生活の地理学」では、「着手の初期においては、かかるわたくしの行動[民家研究]は、それは学究とは何等関係なき物好き事と見られていた感があった」(今 [1940:9])と述べている。ここでは明確に好事家的採集を批判し、あらかじめそれとは別の展開を意図していたことが強調されている。このような批判は、彼の協力者であった竹内芳太郎が1943年に次のように述べているのと対応するだろう。

従来農村住宅は、一部の建築家や民俗学徒、地理学者等によって、所謂民家として取り上げられて来たものであるが、農民の生活に直接の基底を置いて、内容に迄検索の手をのばそうとした者は、割合に少なかった。単に観賞的な視野[...]に停頓してしまっているのは、学問の進展に寄与することも望み得ない[...]。甘い無責任な旅行者の気持は排斥した

いと心掛けています。(竹内 [1943:77])

同時代、同じ対象を扱いながら、一方はノスタルジックなデザインをパッケージ化して消費しようとする「物好き事」<sup>(11)</sup>、他方は改善を志向しつつ習俗の現状解明に向かう「学究」、という二つの方向が存在したとすれば、民家研究の初期にはそれほど明確に分離されていなかったこれら二つのうち、今和次郎は1930年代半ばに至って、はっきりと後者を選択しているように見える。この選択は、どのようにして行われたのか。

その過程を追う上で見なければならぬのは、彼と農村住宅改善との関わりである。『日本の民家』から約10年を経た1933年、今は『農村家屋の改善』(日本評論社)を刊行している。同書は1932年から開始された農林省農村経済更正運動に呼応する形で各分野の専門家が農村問題の解決策を論じた「農村更正叢書」の一冊として刊行された<sup>(12)</sup>。

欧米の一流国には何処にも手頃で安価な農村住家建築の指導書が一二ならず出来ている。しかるに我国にはそんな意味のまとまった本がない。[...] 本書はこの欠陥を埋めるために先駆けしてみたもので、[...] 我国の農村住家の実情に基いて、余り空想的にならない範囲でその改善法を述べてみたものである。(今 [1933:1])

同書において「民家」という言葉は登場していない。代わりに「農村住家」「農村家屋」「農家」「農村住宅」などの言葉が、慎重に選ばれる。同書は「農村の大衆へ」の普及を意図し、「幾干かの改良をしてみたくなるように感じさせること」(今 [1933:2]) を目指した手引書で

あり、「田園趣味雑談」のように都市生活者を読者として想定してはいない。このような使い分けは、鑑賞対象としての意味が固定化した民家の語感を避けるためであったと考えられる。全編にわたって提示される具体的な現状の問題点と改善案をみると、その項目それぞれが、家族中心の生活や衛生、能率性の追求といった1920年代の生活改善運動を主導していた問題意識の、農村への適用を狙ったものであることがわかる。

嘗ては深い民俗的な根拠によって[寝室を]閉鎖したものであったかは知れないが、現在の住民たちの忘れ果てた様な、そうした伝説めいた迷夢は一気にかなぐり棄てたとていっこうに差支は無い。住家が伝説から生れ出たものでなく、生活のためのものである限り、出来る限り吾々の生活の目的に適合し得る様に改造し行くのが寧ろ当然である。(今 [1933:67])

同書のなかで今は、一貫して常識的とも言える啓蒙家の態度を取りつづける。「住居本来の部分と、労働作業の部分とが余りに雑然と混在している」(今 [1933:39])、「農家のうちには家族達の居間と云うものはない、と云っていい」(今 [1933:48]) と、居住が確立せず接客が重視される間取りを批判し、その改善案を示すとともに共同作業施設や集会場の建設を提案する。「農家に於て最も暗いのは何と云ても、土間と台所と寝間とである」(今 [1933:51]) と指摘し、衛生のための採光と換気を勧めた。また、「農家の台所で働く婦人は一日に八里の行程を歩くと等しいだけの歩数を運ばせる」(今 [1933:77]) と、能率のために設備配置の変更が必要であると説いている。間取りや礼法の歴史についての言及

も、時代を遡り地域を飛躍する起源論的な記述というよりは、意識下に潜んだ由来や根拠を問い直し、それを現在の要求との関係で組みかえるという実践的課題のもとでなされている。

この著作が書かれた1933年前後は、戦前期の今和次郎の活動において一つの重要な転換点になっている。すでに民家調査が当初から農林行政との関わりのもとに開始されたとはいえ、この後、農林省積雪地方経済調査所<sup>(13)</sup>をはじめとして、公的団体の委託による「調査・計画・啓蒙」が急速に比重を増してくる(表参照)。また、座談会のメンバー、あるいは読者が投稿した改善案の評者として『家の光』(産業組合中央会)に登場するのもこの時期である<sup>(14)</sup>。1920年

代から1930年代にかけての今の足跡は、「農村から都市へ」(川添 [1987:179]) 一つまり、民家研究から考現学へ—という形で要約されることが一般的であるが、同時に、今は農村へのまなざしを深化させていたと言える。それはまた考現学の展開とも無縁ではなかったはずである。

この時期の活動のなかで中心となるのが、1936年から41年にかけて、東北六県の住宅に関する現状調査、懸賞募集、模範設計案の作成を目的とした「東北地方農山漁村住宅改善調査」である。この事業の特色として、啓蒙の方法と対象の模索を挙げることができる。

前者に関して、新たな「懸賞設計」が試みられた。そこでは、応募資格者を「素人」に限定

表 戦前戦中期における今和次郎の農村住宅改善関連活動

年	主な活動・役職	著作
1924	・生活改善同盟会調査委員	
1933	・民家研究会 <sup>(15)</sup> (会長大熊喜邦、顧問石黒忠篤)発足	『農村家屋の改善』(日本評論社)
1934	・農林省積雪地方農村経済調査所設立、同所の委託により山形県鮭川村調査(1月) ・農村住宅・共同作業場建築の第一次指導設計案を作成(1月) ・秋田県農村修練道場設計案を作成、付属建物は竹内芳太郎(5月) ・家庭科学研究所発足、委員となる(9月)	
1935	・積雪地方農村経済調査所の伝習会講師として、東北六県の郷倉・共同作業場建築について設計方針の指導を行う(1月)	
1936	・東北生活更新会 <sup>(16)</sup> の委託により、山形県下小学校女教員の生活改善講習会にて農村住宅改善に関する講師を担当する(1~2月)、同会指導委員(4月) ・東北地方農山漁村住宅改善調査委員会(同潤会・東北更新会・日本学術振興会合同)特別委員として標準設計案作成に着手。住宅素人設計懸賞募集審査員となる(4月) ・『家庭科学』編集指導担当(6月) ・民家研究会の機関誌『民家』発行はじまる(10月)	
1937	・農林省雪害研究会の一員として山形・福島・新潟における雪害の視察 ・東北地方農山漁村住宅改善調査委員として現地調査	
1938	・雪害研究会のメンバーにより「雪の会」を設立(12月)	
1939	・雪の会が「雪氷協会」に発展(中谷宇吉郎ほか)、協会の事業として試験家屋を設計、積雪地方農村経済調査所構内に設置し、実際に農家を居住させて観察を行う	
1940	・東北更新会宮城支部の住宅改善講演会および大工講習会の講師を担当する(3月)	
1941	・東宝文化映画『農村住宅改善』を監修、講師役で出演(3月) ・国民生活科学化協会理事に就任(9月) ・国民住居懸賞設計図案募集(住宅営団・毎日新聞)審査員	『草屋根』(相模書房)
1944	・日本製鉄株式会社より北海道、朝鮮各地の労働者住宅研究を委託され、調査旅行(8月)	『暮らしと住居』(三国書房)

[今1937][竹内編1959][東北更新会1941]による

し、設計意図がわかる程度の簡単な設計案とともに、応募者が現在居住する住宅の間取り、建築年代、屋根材料、耕作面積、家族構成などを記入させることにより、現状と要求を知るための調査としての意味を持たせ、さらに、応募者に自らの住宅を再検討させる教育の効果も狙っていた<sup>(17)</sup> (竹内 [1983:327])。

後者に関して、調査の過程で明確になってきたのは、「唯一片の模範設計図や注意事項を示した位では決して農村の人達は振り向いて呉れるものではない」[竹内1940:12]という現実であった。住民に直接訴えるだけではなく、彼らに大きな影響力をもつ「大工」に焦点をあてる必要が認識された。今和次郎の『農村家屋の改善』は、「農民大衆」に向けて書かれたものであったが、それから数年を経て竹内が今の指導のもとに執筆した『東北地方農山漁村住宅改善読本』<sup>(18)</sup>は、明確に読者層を絞り、「大工講習会」の教本として出版されたものである。実際に、東北更新会は分会レベルでの住民への講習会だけでなく、支部レベルで大工への講習会を開催するようになる<sup>(19)</sup>。

今もまた、「唯一片の模範設計図や注意事項を示した位」の改善運動への不満を募らせていた。『家庭科学』において、次のように、1920年前後の生活改善運動を批判的に回顧している。

当時の合理化主義の旗のもとには、政治性も、階級性も、その他の社会的現実性もなかったという点で深みがなかった […]。合理化主義は、生活というものを、一個の模型によって、また机上において考究したところから発しているところに、根本的な誤謬があったことを反省出来る。(今 [1943:2])

多くの生活合理化論が机上のモデルしか提示

できず、ほとんど広がりを持てなかつただけでなく、その弱点がそのまま家政学に持ち越されており、戦時体制のもとでの「生活の科学化」論もまた、同じ危険をなぞっていると警告する。「栄養指導者制度」<sup>(20)</sup>を拡充し、「生活指導者」を配置するという提案(今 [1941a])は、こうした指摘と呼応する。1948年の法制定にはじまる「生活改良普及事業」、およびこれを受けて翌年から募集・養成が始まった「生活改良普及員」制度は占領下日本におけるアメリカの強力な指導のもとで創設されたとされる(市田 [1995a])。今の生活指導者案は明らかにこれを先取りするものであった。

「個々の研究が生活の中に吸収されてはじめて意義があろうが、都市はとにかく、農村の場合はそれを吸収せしめる手段が大変なのだ」(今 [1941a:10])と述べるように、1930年代後半の活動を通じて今和次郎は、生活の「慣習的性質」に直面し、合理化の届かぬ領域に触れる。そこで彼が認識したのは、高度なモデルを提示する前に、まず生活それ自体へまなごしを向けさせることの重要性であった。

#### 4. 造形論と改善論の接合

ここまで述べてきた今和次郎の生活改善論の特徴は、以下の二点に集約できる。まず、造形論と改善論の関係である。『農村家屋の改善』には、トタン板のような新しい建材の登場に際して、「到底我々建築家の思い及ばない様な新工夫を使いこなしている」(今 [1933:56]) ことを見逃さない観察者の態度をも見ることが出来る。改善を講じている運動家としての今と意外な造形に出会って感銘を受ける考現学者としての今は決して別人ではない。むしろ造形論と改善論が結びつくところにこそ彼の特色がある。

関東大震災後、都市住民自らの手によって数多く建設された応急バラックのスケッチに奔走したように、今和次郎はしばしば建築の「原型」を探ろうとしたとされる。その姿勢は、日本文化の起源への執着というよりは、デザインの専門家ではない人々が日常生活の場を物の製作や配置を通じて構成＝デザインしてゆく力の根源性への関心によって支えられていた。今が「雪の降らない地方で工夫された作り方そのまゝ、を雪の降る地方でも遠い昔から採用して今日に至っている」(今 [1939b:160])、「工夫をせずになまけていたのであります。」(今 [1939b:167])と述べるとき、生活を構成する造形力の不均衡を問題にしていたと言えるだろう<sup>(21)</sup>。その農村住宅研究と考現学は、生活の造形力を伸長あるいは抑圧し、水路付ける社会的条件への関心によって、根底において結びつくことになる。

もう一つの特徴は、「媒介者」への着目である。この点を同時代の生活研究者・西山卯三<sup>(22)</sup>(1911-1994)との対比において明らかにしたい。

西山の方法的起点は、1930年代における都市住宅の「住み方調査」に求められる<sup>(23)</sup>。一連の調査についての論文のなかに、夫婦と子供の同室就寝を「混寝」と名づけ、その出現要因を分析した「夫婦就寝室の隔離に関する就寝慣習」(西山 [1943→1967])と題する報告<sup>(24)</sup>がある。このなかで彼は、住宅の狭小、不適當な間取りが、「集約就寝」と「混寝」を強制していると述べる一方で、「混寝」は住宅の物理的構造の反映であるとともに、居住者による関心の構造の反映でもあると指摘する。職業層別の分析において、「混寝」率の大小が、「居住者の精神的・物質的な生活水準の順位を示す」(西山 [1943→1967:246])ものと解釈されているように、寝方の違いを通じて、居住者自身の身体の

ふるまい、および空間への意味づけが階層ごとに異なっていることを見出す。

西山の住宅計画論の特色は、「住宅形式」と「住み方」の関係を考えること、そしてそれらを媒介する位置に「住居観念」を置くという点にある。彼が戦時期において提示した構想群は、住宅の生産・供給・消費にわたる広範囲なものであった。しかしそこではつねに「慣習」と「観念」の問題が念頭におかれていた。彼は、住居がもつ観念的、慣習的性質について自覚的であろうとしたと言える。それはまた、住宅改善指導の展開のなかに身を置きながら同時にその限界を認識することを通じて、生活の慣習的性質の分析を軸に「生活学」を模索していた同時期の今和次郎とも共鳴する視点であった。

逆に、もっとも大きな差異は慣習を「変える」方法についての認識である。西山は、慣習は住宅形式そのものに誘導されて変化すると考え、住宅の供給こそが「あらゆる教化よりも直接に住居慣習の改善向上に役立ち、これを現実化する」(西山 [1943→1968:82])と主張する。一方、今和次郎は物の供給より、媒介者の配置を強調した。

今と西山の違いは、まず、都市と農村のどちらを活動の場としたかという点に関連しているだろう。西山の課題は、住宅が商品として流通し、居住者とその消費者となる場、つまり都市住宅市場をいかにコントロールするか、というレベルに設定されていた。建築行政が日々膨大に集積する新改築住宅平面図の数量的分析、大量の標準化されたアンケートの利用など、西山の採用した手法は、都市住宅、都市住民の流動性と大量性に準拠したものである。このような研究手法は、家族人数と部屋数を対応させることを住宅供給政策の当面の目標とした彼の計画論とも密接に関連する。



これに対し、今の課題は、基本的に地域に定着して居住することを前提とする農村住宅の改善にあった。伝説のように語られる彼の調査手法<sup>(25)</sup>も、農村の社会的特性に準拠したものだったといえる。もっとも、彼自身はそれを名人芸にとどめようとしたわけではなく、対面的状況で生活を観察し、改善をうながす指導者の育成を熱心に説いた。それが先に言及した生活調査の指導や生活指導者配布の提案となり、戦後における生活改良普及員制度への関与<sup>(26)</sup>につながる。

## 5. モノと身体の交渉

強力な国家による住宅産業の再編成と住宅政策を構想する西山の立場と、媒介者を通じた改善運動に向かう今の立場の違いは、舞台が都市であったか農村であったか、という点だけでなく、その身体観における基本的視点の差異にも根ざしている。

西山は、環境に順応する受動性として身体を捉え、環境(住宅)の改良を外在的、政策的に実行しようとした。戦時期の社会政策的な生活研究においては、家計調査や生活時間調査のデータを通じて生活がもつ慣性的な構造が見出され、それが崩れるとき、労働力再生産の麻痺を通じて重大な人的資源の消耗が生じると主張された。戦時下の生活諸条件の悪化に直面して、身体がもつ弾力性の限界というべき「生活構造」が逆説的に見出されるわけであるが、西山の住み方研究が照準したのもまた、そうした生活の構造的に他ならなかった。そして、そこでの身体は、あたかも機械における摩擦抵抗のごときものとして捉えられる。それをゼロにすることはできないにしても、いかにして身体の抵抗力を顕在化させず、生活という領域を社会の生産

力に向けて円滑に動員するか、という点に関心は集中してゆくのである<sup>(27)</sup>。

西山とは対照的に、今和次郎は身体を、環境を造形する能動性として捉える。そして、その能動性を抑圧する社会的配置への批判こそが生活改善にむけた活動の動機となる。農村だけでなく北海道・朝鮮の労働者住宅調査(1944年)をもとに執筆した『働く人の家』(1947年)などでも、社宅の監督者の役割に注目しているように、今は住民との日常的な関係の中で意識化を促す主体、および彼らとの関わりの中で自らの生活を形成する住民の個別的な実践に着目していた。

ところで今は、敗戦直後に執筆された『住生活』(1945年12月)のなかで、「住居といえば、それは外面的にみれば単なる空間である。しかし人間と住居空間との交渉から住生活が生誕する」(今 [1945:24])と述べている。今のミクロな身体的実践に対する関心は、この、モノと人間の「交渉」という発想に最もよく現われているのではないだろうか。同書の冒頭では、戦災によって多くの人々が体験したであろう、住宅をはじめとする生活財の喪失という出来事が印象深く記述される。

生活習慣の喪失という点においては [...] [人が亡くなった場合より] いっそう徹底的で支配的である。これまで使っていた品物のあれもない、これもないという不便、すなわち習慣を断切ることと移転への強制は、いちいちの機会に習慣的行為とは反対である意志的行為を促され、積上げさせる。(今 [1945:8])

戦災という断絶に直面した人々に対して、家庭生活をいかに建て直していくべきかを示すという実践的目的を持ったこの書物は、「物と人

との生活とが二人三脚的な結ばれ」を持っているがゆえに「おのずから定型づけられている生活習慣があること」(今 [1945:9])を確認し、生活がモノと身体の交渉の慣習化された形式に他ならないと指摘するところからはじまる。

今はすでに『日本の民家』において民家研究の目的を「趣味の建設」(formation of taste)に置いている。ここでの「趣味」は、生活についての感受性の意に他ならない。

誰もがこんな経験を有することをいつわれないだろう。[...]住宅を緊急問題として色々工夫して行けば行く程、人間の生活と言うものは何かと言う疑いを深めて行く一面が這い出て、忠実なる者を悩まし苦しめることを。空間(自然)は人間によって征服さるべきものにあらず、空間の有する固有の力は厳として認めなければならず、それを私達は単に利用するに止むのであると云うことを。私達は私達の先入観念から少しの空間をでも十分駆使し得たと思うところに、いつも私達の工夫の破綻が芽を出して来る(今 [1922→1943:8])

ここで「空間」と等置された「自然」という言葉を、ただ自然条件という意味だけで受け取るべきではないだろう。「[建築物には]自然の関係からばかりではどうしても判断のつかない不思議なことが沢山ある」(今 [1922→1943:33])と述べるように、それは社会的慣習をも含んだものとして捉えられていた。

物質性として現われる自然化された慣習の規定力に、どれだけ反省的であることができるか、そして身体とモノがいかに豊かに交渉することができるか、というところに、「趣味の建設」の中心的な課題が存在していた。この、民家論

の内に伏在していた身体的感受性の形成による造形力の獲得という課題が、1930年代から戦争にいたる時期において農村生活改善という具体的な場と結びつくとき、慣習を意識化する媒介者の役割の大きさを意識するに至った、と暫定的に結論することができる<sup>(28)</sup>。

このような今和次郎の軌跡が示唆するものは、モノと身体交渉史においてこの時期が持っている根本的な重要性だけではない。本稿が明らかにしようとしてきたように、その生活論を戦時/戦後、権力/反権力、生産/消費といった二項対立の中に封じ込めることはできない。彼の思想と実践は、決して特異であるがゆえに意義を持つような性質のものではなく、そもそも近代社会が内包していた一つのオルタナティブであると言いうる。それゆえに、モノと身体交渉という視点、そして身体造形力を組織する媒介者を中心とした集団の実践から、生活の近代を読み直す必要がある。

その過程の解明は、同時代を生きた今自身の中心的な課題であったとともに、私たちが取り組むべき近代日本社会研究の課題でもあるはずである。

#### 註

(1) 1934年、大日本連合婦人会と大日本連合女子青年団が「家庭生活の充実と家庭教育の振作」を目的として設置した機関。今和次郎は戦後、同研究所の所長を務めた。

(2) 以下、引用文中の傍点ならびに [ ] 内は引用者が付した。[...] は中略、後略を示す。また、仮名遣い、漢字表記は適宜改めた。

(3) 文部省が設立した生活改善同盟会を中心とする官製運動である。生活改善運動に関しては中寫 [1974]、小山 [1999] 等を参照のこと。

- (4) 「地理的に研究された生活学」とも呼んでいる  
(今 [1940:14])。
- (5) 日本放送協会や麓山京らによる生活時間研究が  
まだ本格化していない時期であり、特に農村生活  
調査としては先駆的な研究である。このとき作成  
されたデータは、自ら構成、出演した1941年の映  
画『農村生活改善』(東宝文化映画部、監督・野田  
真吉)や『住生活』(1945年)をはじめ何度か再利  
用されている。
- (6) 「生活の地理学」とほぼ同内容の文が『家政論』  
に収められている。しかし、初出は1947年刊の単  
行本『家政のあり方』とされている。
- (7) 小池新二は『家庭科学』誌上で次のように述べ  
ている。「考現学の創始者として、民家の研究家と  
して、将又新しい生活学の提唱者として今和次  
郎先生のお名前を知らない読者は一人もないと思  
う。」(小池 [1942])
- (8) 経済学者・森本厚吉の生活論と、彼が中心とな  
って展開した文化生活研究会、文化普及会の活動  
を概説した寺出浩司は、大正期の理想主義と昭和  
の軍国主義とを対比させ、森本が敗北していく原  
因に、その内在的な要素とともに、「『生活』の時  
代の終焉」(寺出 [1987:121])を置いている。天  
野正子が考現学と戦後の生活学を並べているよう  
に、戦時期を「生活」の空白時代と捉えるという  
論じ方はポピュラーなものといえるだろう。
- (9) だからといって、今和次郎を近代的国家権力の  
体現者としての役割だけに還元する読み方もまた、  
十分ではないだろう。例えば、フーコーに依拠し  
ながら、今の庶民生活に寄り添う身振りと、啓蒙  
家としての側面に着目した柿本昭人 [1993] は、  
彼を「反意語としての国家と結びつく牧人＝司祭」  
と呼んでいる。柿本は、「大衆や庶民という「善玉」  
への関心から、今和次郎の反権力や生命尊重主義  
を引き出すのは容易だ。[...] 今和次郎が大衆の生  
活に関心をもったことを大衆への愛だと感じる人

- びとがいるとしても、それは当然のことかもしれ  
ない。フーコーがとりあげた牧人＝司祭もポリス  
も、それは〈愛のシステム〉だったのだから」(柿  
本 [1993:74-75])と指摘する。その立論は「総力  
戦体制」というキーワードをもとに戦時期に形成  
された社会構造と戦後社会の連続性を論じる山之  
内靖他編 [1995]にも近い問題意識に支えられて  
いる。これまでの今への評価が、ある予断ととも  
になされてきたとすれば問題であり、それを指摘  
することには一定の意義がある。確かに今は、反  
権力どころか戦時期にあっても国家と関係を結ん  
でいたし、その中で影響力を行使しようとしてい  
た。しかし柿本による批判は十分なものとはい  
いがたい。その活動を国家との一元的な関係の中  
に解消し、「善玉＝今和次郎」の像を反転させるこ  
とに終始しているからである。今和次郎を論じる者  
の多くが、生活の固有性を発見した今の反権力性  
を評価するのに対し、柿本は生活を論じることの  
権力性を指摘する。方向は正反対であっても、そ  
うした結論を急ぐ論じ方は、同時代において今和  
次郎が持っていた位置や彼が活動した「場」の具  
体的検討を閉ざしてしまうと考えられる。
- (10) 一方で、萩原正三 [2000]、月館敏栄 [2000]  
が、農村建築学の立場から、今和次郎が関与した  
戦前期の住宅改善について基礎的研究を行っている  
が、同時代の生活研究や生活学との関連は論じ  
られていない。
- (11) 1930年代には、都市新中間層向けの婦人雑誌に  
は住宅紹介記事が数多く掲載されるようになる。  
そこに現われる「農家風を加味した近代的な日本  
住宅」(『主婦之友』1933年10月号)といったキャ  
ッチ・コピーからは、農村住宅の意匠をデザイン  
のヴァリエーションとして操作しようとする態度  
を読み取ることができる。今和次郎が「物好き事」  
と呼んだものは、そうした商品化への志向であっ  
たと考えられる。

- (12) これも著作集には収録されていない。
- (13) 冷害（1931年）、大津波（1933年）などによって東北地方が深刻な打撃を受けたのを機に設立された。
- (14) 農家住宅研究会（中村寛・今和次郎他4名）「農家住宅はどう改良するか」（1932.4）、今和次郎選評「改良農家住宅の設計実例」（1934.4）、今・木檜恕一・大矢信雄他10名「住宅の改善目標十五ヶ条農村生活の建直し」（1934.10）など。
- (15) 竹内の回想によれば、この研究会を作るときに、今は「民家」の語を冠することに反対したという（竹内 [1971]）。同会は「史的研究・現状調査・改良計画」を目的とし、機関誌『民家』を発行した。実際の誌面を見ると改良計画はそれほど登場しないとはいえ、ここには、『農村家屋の改善』との問題意識の連なりを見ることができる。
- (16) 1935年、前年に起こった東北地方の冷害を機に、東北地方の生活改善を目的として設立された団体で、のちに財団法人化され、「東北更新会」と改称、本部は内閣東北局内に置かれた。東北六県に支部が、110ヶ所（1935年当時）の指定町村には分会が設置された。
- (17) 「応募図案数2550通の多数にのほり…而も其等は非常に熱心に工夫されて居り、中には現住々宅の改善案を提出せられているものもあり、又一家挙って競争的に各種の案を提出している者もあり、殊に婦人の応募者が相当数を占めていた」（中村 [1936:16]）。それまでの農村住宅懸賞設計は専門家を対象としており、このような方式のものはなかった（ただし大工は応募可能であった）。おそらく、同潤会が1933年に実施していた「職工住宅素人設計懸賞募集」の成功を受けたものであったと考えられる。この懸賞募集もまた調査と住教育という二つの側面を持っていた。その結果に自信を得た同潤会は、実際に職工向け住宅の供給を開始する（祐成 [2000] 参照）。
- (18) 1940年、同潤会・東北更新会の共同事業として発行された。ほぼ同内容のものが1950年、竹内芳太郎『農村住宅の改善』（相模書房）として刊行されている。
- (19) 今、竹内、中村寛（内務技師、のちに厚生技師・東北更新会評議員）のように中央から派遣された者のほか、各県の技師や学校教諭などが講師を務めた（東北更新会 [1941]）。例えば1939年度中に、宮城県支部では二日間の講習会を2回開催し、参加者は計329人、また、青森県支部では三日間の講習会を二回開催し、参加者は計148人にのぼった。後者について、「遠隔地よりの出席者二十数名は多額の旅費を費して宿泊滞在し無欠席の熱心味を現わす等全員熱心に受講」（東北更新会 [1941:315]）と報告されている。
- (20) 内務省社会局、のち厚生省により、1937年から東北六県に限定して配置されていた。
- (21) 佐藤健二 [2001] によれば、古語が周縁に残存するという柳田国男の発想が、一つの起源を持った同心円構造を形成する全体としての日本文化の存在を立証しようとしていたというよりも、「新語」を造る能力の不均衡とその歴史性を指摘していたという。この柳田の新語論と今和次郎の造形論の立場との共鳴を論じることができるであろう。
- (22) 当時は住宅営団研究員。戦後、京都大学教授となり、住宅計画学の確立に寄与した。
- (23) この調査の過程で「集中就寝」と「食寝分離」という現象が発見され、nDK・型計画につながる各種の提案が生まれた。主な調査報告、住宅計画論は、『国民住居論攷』（1944年、伊藤書店）、『住宅計画』（1967年、勁草書房）にまとめられている（祐成 [2000] 参照）。
- (24) 約1万の調査票を大阪、京都、名古屋の町内会・隣組組織を通じて配布回収した「中部三都市住み方調査」（1941年）に基づく報告。
- (25) 対象者の面前でメモをとらない、世間話のよう

に展開しながら決して項目を漏らさない、など。

(26) 生活改良普及員の資格試験委員を務めたほか、普及員のための指針として「生活病理学」(『農業朝日』連載1952年1~12月)を執筆した。

(27) 西山がマクロなシステムを運営する視点から生活を捉えようとしたとするなら、今はミクロな身体的実践から生活を捉えようとした。「併し今や時代は大きく転回しつつある。国民大衆の住む住宅は、[...] 国土を構成する国民住居施設の最要の部分を含め、国民生活に於ける欠くべからざる重要な施設であるという点で、その国家的性格を明にして来たのである。[...] 住宅は今や「国民住居」として把握されねばならない。[...] 併しその如き理念の成立は、近々数年来の事実である」(西山 [1944:1])。「十九世紀の半ばから二十世紀にかけて栄えた家政学の破産、女学校での教育指針の破産が来たされたのである。実に戦争中の家政学の先生達は右往左往するのみで、誰も自信ある立言

をするものはなかった。(この間の消息を、家庭科学研究所の一委員として家事教員諸氏の会合に縷々出席していたわたくしはしみじみ経験させられたのである。)(今 [1945:11])。今や西山はそれぞれの立場から「自信ある」発言を繰り返していた。こうした異質でありながら相互補完的な思考が生じ、交差したという意味でも、戦時期は近代日本において生活が意識化される過程を考える上できわめて重要であると言えよう。

(28) 戦後農村の生活改善普及事業に関してすら、研究の層は厚くない(市田 [1995a] [1995b] ; 辻 [1998] ; 天野 [2001] 等)。そして、それらの研究では必ずと言っていいほど戦前と戦後の断絶が強調される。今和次郎という運動家に注目し、その忘れられた活動の素描を試みた本稿は、こうした通念を近代日本における生活改善の経験に即しながら再検証するための手がかりとなるであろう。

## 文献

- 天野寛子 2001 『戦後日本の女性農業者の地位』 ドメス出版
- 天野正子 1996 『「生活者」とはだれか：自律的市民像の系譜』 中央公論社
- 市田知子 1995a 「生活改善普及事業の理念と展開」『農業総合研究』49巻2号 農業総合研究所 pp. 1-63
- 1995b 「生活改善普及事業に見るジェンダー観」『年報村落社会研究』31号 日本村落研究学会 pp. 111-134
- 伊藤ていじ 1963 『民家は生きている』 彰国社
- 自由学園卒業生 1939 「能率から見た『農村主婦の生活』調査：農村住宅改善のための資料」『婦人之友』33巻6号 婦人之友社 pp. 112-129
- 柿本昭人 1993 「牧人=司祭としての今和次郎」『現代思想』21巻7号 青土社 pp. 74-87
- 川添登 1982 『生活学の提唱』 ドメス出版
- 1987 『今和次郎：その考現学』 リプロポート
- 小池新二 1942 「読書紹介 今和次郎先生著『草屋根』を読む」『家庭科学』69号 家庭科学研究所 pp. 46-47
- 今和次郎 1922→1943 『日本の民家』 乾元社
- 1933 『農村家屋の改善』 日本評論社
- 1937 「東北地方農村住宅改善問題」『家庭科学』9号 家庭科学研究所 pp. 11-21

- 1939a 「この調査に就いて」『婦人之友』33巻6号（自由学園卒業生〔1939〕の解説） p. 115
- 1939b 「雪国の家屋」『家庭科学』15号 家庭科学研究所 pp. 26-35
- 1940 「生活の地理学」『家庭科学』19号 家庭科学研究所 pp. 2-14
- 1941a 「栄養指導者の闘いつつある実情を見て：生活指導者配布の急務」『家庭科学月報』58号 家庭科学研究所 pp. 8-11
- 1941b 「生活態度の問題」『家庭科学』68号 家庭科学研究所 pp. 9-17
- 1943 「合理化主義と間に合せ主義：そしてその十字路」『家庭科学』84号 家庭科学研究所 pp. 2-7
- 1945 『住生活』 乾元社
- 小山静子 1999 『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房
- 黒石いずみ 2000 『「建築外」の思考：今和次郎論』 ドメス出版
- 中寫邦 1974 「大正期における『生活改善運動』」『史艸』15号 日本女子大学史学研究会 pp. 54-83
- 中村寛 1936 「秋田・山形両県下農村住宅素人設計懸賞募集に就て」『民家』1巻2号 民家研究会 pp. 11-13
- 西山卯三 1944 『国民住居論攷』伊藤書店
- 1943→1967 「夫婦就寢室の隔離に関する就寝慣習」『西山卯三著作集1巻 住宅計画』 勁草書房
- 1943→1968 『住宅問題』→『西山卯三著作集2巻 住居論』 勁草書房 pp. 231-248
- 荻原正三 2000 「今和次郎と竹内芳太郎の（財）同潤会東北地方農山漁村住宅改善調査」『農村建築』109 農村建築研究会 pp. 59-69
- 佐藤健二 2001 『歴史社会学の作法』 岩波書店
- 生活研究同人会編 1982 『近代日本の生活研究：庶民生活を刻みとめた人々』 光生館
- 祐成保志 2000 「ことばのなかの住居：近代日本における『生活』の対象化」『ソシオロゴス』24号 ソシオロゴス編集委員会 pp. 125-147
- 武長脩行 1982 「今和次郎：風俗の探検者」生活研究同人会編〔1982〕 pp. 221-240
- 竹内芳太郎 1940 「東北の大工を動員：大工講習会」『家庭科学月報』50号 家庭科学研究所
- 1943 「戦う農村住宅」『住宅』28巻9号 住宅改良会 pp. 77-78
- 1971 「解説」今和次郎『民家論』今和次郎集2巻 pp. 473-488
- 1983 『年輪の記』 相模書房 pp. 367-372
- 編 1959 「今和次郎先生年譜」『民家：今和次郎先生古稀記念論文集』 相模書房
- 寺出浩司 1987 「森本厚吉と文化普及会」川添登編『日本の企業家と社会文化事業』 東洋経済新報社
- 1994 『生活文化論への招待』 弘文堂
- 東北更新会 1941 『東北更新会各支部施設事業情况 昭和十四年度』
- 辻智子 1998 「農村の『生活改善』と女性のグループ活動」『人間発達研究』21号 お茶の水女子大学人間発達研究会 pp. 45-54
- 月館敏栄 2000 「戦前の今和次郎の研究活動」『農村建築』109号 農村建築研究会 pp. 70-76
- 山之内靖他編 1995 『総力戦と現代化』 柏書房
- 吉阪隆正 1972 「後記」今和次郎『今和次郎集9巻 造形論』 ドメス出版 pp. 502-512

※本論文は文部科学省科学研究費補助金（2001年度）の研究成果の一部である。

（すけなり やすし、日本学術振興会、ysuke@mba.sphere.ne.jp）

## **The formative power of bodies**

Wajiro Kon and the discourse on the everyday life in wartime Japan

*SUKENARI, Yasushi*

Japan Society for the Promotion of Science

ysuke@mba.sphere.ne.jp

This article tries to locate the architect Wajiro Kon (1888-1973) in the context of his time through a reexamination of his two activities, which were closely related to each other. Specifically, I focus on Kon's participation in the Noson Jutaku Kaizen Jigyo (rural housing improvement project) in the 1930's and his writings on the everyday life during the wartime period. These activities have been frequently overlooked in previous studies largely because they tended to assume the dichotomy of the wartime and the postwar, power and resistance, and production and consumption. Such an approach fails to account for Kon's rich insights into the formative power of bodies and his lifestyle improvement strategy, which called attention to the roles of those who mediated between progressive ideas and conventional practices. Kon's activities, then, prompt us to reinvestigate the modernity of the everyday life by carefully tracing how bodies negotiated themselves with the material world and by analyzing the activities of the mediators who sought to organize people's formative power in dealing with their built environment.